

脚本タイトル 「ラストサマー」

作者 渚太陽

登場人物

上演年度

ユウジ 高校三年生（先生）

2021年度 宇部地区高等学校演劇発表会 最優秀賞

ヨウガ 高校二年生（生徒）

2021年度 山口県高等学校演劇発表会 出場

ミサキ 高校二年生（母）

登場人物の数 三人（男子2人、女子1人）

作品紹介 部員がたったの2人になってしまった演劇部の部室に、部活仕分けをする生徒会会長が視察に来る。

上演許可を得るための連絡先

宇部鴻城高等学校

第一場 演劇同好会

音楽。

演劇部？の部室。

いろんな人形やぬいぐるみがたくさん飾ってある。

下手の机には、マネキンの頭部（カツラ置き）

舞台中央には、机が三つ向い合せてある。

一つの椅子にマスクをしたヨウガが座っている。

ヨウガの隣の椅子に「お父さん人形」がある。

ヨウガ、ヘッドフォンで音楽を聴いている。

先生役の（ユウジ）が、礼をして入ってくる。

ユウジもマスクをしている。

生徒役の（ヨウガ）は、音楽を聴いているので気づかない。

どうやら、三者懇談の様子。

先生 ……おい。

生徒 ♪♪♪（ヘッドフォンで音楽を聴いている）

先生 おい！止める！

生徒 ♪♪♪

先生 止めろって言うてるだろ！（イヤホンを取る）

生徒 何すんだよ！

先生 今から面談なんだぞ。分かっているのか？

生徒 関係ねーよ！

先生 どうして、そんな態度なんだ。そんなだったら、学校に……。

生徒 いいよ、やめてやるよ！

先生 何言ってるんだ。やめてどうする？

生徒 うるせーよ。先生に俺の気持ちなんて分かんねーんだよ。

先生 何を分かって言うんだ？

生徒 ……。

先生 大体、どうしてあんなことしたんだ。

生徒 やりたくてやったんだよ。いいだろ！

先生 よくないだろう。

生徒 うるせー、関係ないだろ！

先生 ……あのなあ、僕は担任なんだし、関係なくないだろう。

生徒 こういうときに急に担任面すんなよ。

先生 （机の中から、「マックポテト」のケースと「じゃがりこ」の袋を出しながら）一体、どうしてマックのポテトに「じゃがりこ」を混ぜて販売なんかしたんだ？

生徒 う、うるせーよ。

先生 マックのアルバイトとしてあるまじき行為だぞ。それに、カルビーに対してもだ……

生徒 何だよ！偉そうに！！

先生 ……。

生徒 お前に何が分かるんだよ。俺みたいに成績も悪くて素行も悪かったらどこに行っても「どうせダメな奴だ」って見られるんだよ。それなら、その期待に応えてやろうじゃないかって思っただけだよ。

先生 ヨシオ君……。

生徒 店長の驚いた顔ってなかったなあ。客は、割とサービスなのかなあって思ってたけどな。

先生 お前なあ、やって良いことと悪いことがあるだろう。

生徒 ふんっ！

先生 ……だけど、それで注意されたからって学校を辞めることはないだろう。

生徒 ……。

先生 どうした？何で黙ってるんだ。

生徒 別に……。

先生 今日は、（お父さん人形を示しながら）こうしてお父さんにも君の現状を知ってもらおうために来ていたでいてるんだ。言いたいことがあるなら言ったらどうだ。

生徒 ……。

先生 ねえ、お父さん。

お父さん人形に話しかける

先生 お父さん？

人形だから当然返事がない。

生徒 ……また、ダンマリかよ。都合が悪くなったらいっ

もそうだよ。おい！何とか言ってみろよ。

当たり前だが、人形はしゃべらない。ヨウガ、人形の首を掴んで持ち上げる。

生徒 いい加減むかつくんだよ。いつも何も言わないでニコ

ニコ笑ってるだけなんてよ。この野郎！

先生 こら！やめろ！

生徒 ちつくしょー！

人形を投げ飛ばす
静まりかえる

先生 うわー大変だ、お父さん大丈夫ですか？

駆け寄るユウジ

先生 お父さんお父さん！返事がない。（人形の胸に耳を当てて）音がしない。

生徒 ……。

先生 なんて事をしてくれたんだ。お前は。どうしよう、どうしよう。そうだ、救急車だヨシオ！救急車！

鬼気迫る様子で、お父さん人形の心臓マッサージや人工呼吸を繰り返す。

ユウガ、カツラを取りながらユウジに近寄る。

ユウガ ……先輩。

ユウジ へ？

ユウガ やっぱり、二人で三人の芝居は…。

ユウジ そうだなあ。無理、あるよなあー。照明も音響もないし…。

ユウガ お父さん…人形じゃあな。

ユウジ はあーあ。

ユウガ、人形を抱えて机に置く。

消毒液を手取る

ユウガ はい（ユウジにすすめる）

ユウジ あ、どうも（手指消毒する）

ユウガ で、どうするんですか先輩。

ユウジ え？

ユウガ だから、台本。

ユウジ あーあ（頭を抱える）

ユウガ こんなんで、大会、間に合うんですかねえ。

ユウジ ちつくしよー！部員が欲しい…。

ユウガ OBからは、「大会に合わせて帰ってきます。楽しみにしてるからね。」とか言われてるんですよ。

ユウジ 分かってるよ、それに「今年は、創作やめて、人数

の多い既製の台本にチャレンジして・ね。」とか言われて

てるんだけど、部員少ねーし、先生来ねーしさあ。部員

が欲しい…あーあ、男二人じゃなあ、…い、胃が

痛い。

ユウジ マスクを外して何かを口にする

ユウガ だったら、イラスト部とかに頼んで、助っ人やって

もらいますか？…って先輩、何やってるんです？

ユウジ いや、いろいろ考えると胃がむかむかしてさ。こ

やって、これ飲むとスッキリするんだ。

ユウガ そうなんですか、先輩、そんなにまで色々悩んでたんですね。すみません俺……。

ユウジ いいよ、別に。

ユウガ で、どこの薬ですか？俺、胃薬ならいいヤツ知ってますよ。

ユウジ うん？これ？ああ、これ薬じゃないよ。

ユウガ は？

ユウジ ラムネだよ。ラムネ。これ飲むとスッキリするんだ。

ユウガ ラムネですか？

ユウジ 昔、小さい時に、母親が泣いてる僕に食べさせたら泣き止んだんだって。その時からのおまじないみたいなんなんだ。

ユウガ へえ、そうなんですか……でも、ちゃんと薬飲んで方が良いですよ。

ユウジ まあね。

ユウガ それより、どうしますか大会。

ユウジ そうなんだよなー。OBの目もあるし、大会でないとなあ……それに俺も最後の夏だから出たいしなー。

ユウガ そうですよ。先輩、ラストサマーですね。

ヒグラシの鳴き声

ユウジ (プリントを眺めながら) いろんな意味で、ラストサマーにならなきゃいいけど。

ユウガ 何ですか、それ？

ユウジ ほら。

ユウジ、ユウガにプリントを渡す

ユウジ この前、顧問からもらったんだ。

ユウガ えー！先生に会ったんですか？

ユウジ (先生の物真似) 「お前の演技は、自分に嘘をついている。ドーン」

ユウガ おお！上手い。似てる似てる。

ユウジ 「俺は、人に嘘をつくのも嫌いだが、自分に嘘をつくのが一番嫌いだ。」

ユウガ そうそうそんな感じ。いいなあ、先輩、先生に会えたなんて。あの先生、探すの大変なんです。この前なんかですね。

ユウジ まあ、いいからさあ、そのプリント見てみ。

ユウガ えーと、何ですか、……同好会？どういうことですか？

ユウジ 生徒会規約。部活動について「部費を請求できる学

校から認められた部活動は、部員の人数が二人以下となつた場合、同好会に格下げする」

ヨウガ 一、二。

ヨウガ、人数を数えるが、二人しかいないので部室にあるぬいぐるみやマネキンの頭を数えだす。

ヨウガ 三、四、五……。

ユウジ こらこら。

ヨウガ ダメですか？入れちゃあ。

ユウジ うん。

ヨウガ えーっ！じゃあ、今年の俺たちは、すでに同好会なんでしょうか？

ユウジ そう。

ヨウガ ワオ！同好会って大会に出られるんですか？

ユウジ それは、顧問が、加盟費とか参加料つてのを払つてるから問題ないって。

ヨウガ なるほど。

ユウジ でも廃部になったらだめだよなー。

ヨウガ えーっ！うっそー！来年、廃部なんですか？同好会のままでもいいじゃないですか。

ユウジ 同好会のままだったら部費がつかないだろう。そし

たら加盟費とか、そういうのを払えなくなるじゃん。そして廃部と同じだよ。

ヨウガ 先生に永遠に払ってもらえばいいじゃないですか。ユウジ あのねー、そういうわけにはいかないだろう。ああ、

OBに何て言えば……。

ヨウガ でも、先輩。大会に出られなくても大丈夫ですよ。一人で文化祭とかで頑張つて上演して、新入生の獲得に、全力で頑張りますよ。

ユウジ おーお、前向きでいいねえ。はあ……。

ヨウガ だから、廃部はありませんよ……？ん、あつ、同好会だから廃会か。

ヨウガ、机のまわりをウロウロする。

ユウジ おじいちゃん。あ、おじいちゃんいたいた。

ヨウガ ああ、ユウジどうしんだい？

ユウジ おじいちゃんこそ何やってるんだよ。こんな夜に、出歩いていたら危ないよ。

ヨウガ 大丈夫。おじいちゃんは、夜の散歩だよ。

ユウジ そういうの老人性徘徊っていうんだよ。

ヨウガ ああ、徘徊……

見つめあう二人。

ユウジ ゴホン、オイ。

ヨウガ すいません。

ユウジ でな、その下の部分読んでみろよ。

ヨウガ えーと、尚、今年度より同好会の活動状況は、月一回の報告義務がありますので、報告書を顧問に提出すること。また適宜、生徒会が活動状況を見学に行くこともあります。その報告書の内容や見学の際の活動状況が芳しくない場合、生徒会権限でその会を「解散」させることが出来る。ああ、解散って言うんだ……だー、うそっ！ってか生徒会権限って、生徒会、強っ！

ユウジ だろう。

ヨウガ 解散させられちゃうんだ。で、どんな報告書なんですか？

ユウジ これ先月の。(プリントを渡す)

ヨウガ (受け取って) 「活動状況。ランニングにストレッチ、ゲーム形式のコミュニケーション力アップ、発声練習に滑舌練習。」……で、実際は？

ユウジ 「ゲーム機にパワプロ入れて、選手育成のランニングやストレッチのコマンドを選び、通信対戦をしながら、コミュニケーション力をアップし、『やったー』とか『く

そーっ』って声出してた。」

ヨウガ ……ジー。(部長を見つめる)

ユウジ ……アハ。(笑)

ヨウガ 解散。

ユウジ ギクッ！

ヨウガ 解散ですねこれじゃあ。

ユウジ ギクギク、グサ！い、痛い。(胸を押さえる)

ヨウガ 活動してないじゃないですか。全然ダメ。解散だな。

ユウジ 解散、解散言うなよ。お前がそう言うたびに、胸がズキズキ痛むんだよ。

ヨウガ でも、こんな状態じゃあ。

ユウジ 解散なんかになってみる。OBになんて言われるか。想像しただけでも、ああ恐ろしい……。

ヨウガ 解散。

ユウジ うっ。

ヨウガ 解散！

ユウジ あっ！

ヨウガ 解散ビーム！

ユウジ うわー、ボタン(倒れる)

ヨウガ 先輩相変わらずノリがいいですね。さすが、演劇部。

ユウジ お前もな。

ヨウガ そうですかあ、へへ。あ、そういうば、聞いた話

なんですけど大阪の人は、演劇部じゃなくても、刀で切るマネをしたら、道行く普通の人でも切られ役をやるらしいですよ。

間合いを取る二人。

すれ違いながら、

ユウジ シュバツ (刀で切る音マネ)

ヨウガ うわー、やーらーれーた。(倒れる)

ユウジ シャキン (刀に鞘に納める音マネ)

ヨウガ (起き上がりながら) つてすごいッすねー。

ユウジ 関西の芝居観たことあるけどノリが違うもんな。

ヨウガ ホンマですな。

ユウジ 何でやねん。

ヨウガ ……先輩、ツッコミは下手ですね。

ユウジ 悪い悪い。でも、本当に「解散」つて言うのやめて

くれよ。結構気にしてるんだから。

ヨウガ ハイハイ。それで、今日はどうします？練習。

ユウジ うーんじゃあ、フオートナイトでもする？

ヨウガ 先輩。

ユウジ えっああ、APEXだろ？そうだよな今、熱いもん

な(ゲーム機を片手に)

ヨウガ ふざけてるんですか？

ユウジ う、うそだよ。

ヨウガ 絶対、本気でゲームしようとしてたよ。

ユウジ そうだなあ、とりあえず台本どうする？先生も書かねーし。

ヨウガ 既製台本って人数が少ないのつて、あんまりないですしね。

ユウジ うーん。

悩む二人。

部室の外から声。

第二場 生徒会登場

ミサキ すいませーん、誰かいますか？

ヨウガ 誰だろう？

ユウジ マ、マズイ！

ヨウガ はい(と返事をしようとして)

ユウジ、慌ててヨウガの口を塞ぐ

ヨウガ ちよつ、ちよつと、(モゴモゴ)

ユウジ シッ！静かに。

ミサキ (廊下で) あ、しまったー。検温機ないじゃん。取りに行かないと……

ミサキ、戻っていく。

シーンとなり、廊下の様子を伺うユウジ。

ユウジ、ユウガの口から手を放す。

ユウガ ハアハア、ちよつと先輩。急に何するんですか？

ユウジ 行ったみたいだな。

ユウガ どうしたんですか？

ユウジ 今日は、火曜日だろう？

ユウガ はい。

ユウジ 火曜日に生徒会が視察に来るって言った。

ユウガ えっ！な、何のために。

ユウジ それは、仕分け作業のために決まってるじゃないか。

ユウガ 仕分け？

ユウジ 生徒会って怖いだろう。鬼みたいなんだ。こつちの意見なんて全然聴いてくれないんだ。

ユウガ、近くにあった小道具を手に取る。

それをマイクにして、国会で追求する人になる。

ユウガ この同好会は必要なんですか？

ユウジ ええ、まあやっぱり、必要だと。

ユウガ どの部分が必要なんですか？

ユウジ いや、あの……。

ユウガ お金をかけて、高い家賃の部室を借りて、

ユウジ いや、家賃って。

ユウガ 生徒の大切なお金を使う意味があるんですか？

ユウジ やっぱり、文化の大切さをですね。

ユウガ はっきり言って下さい！

ユウジ ですから……。

ユウガ 必要なのかどうか分からない道具をいつも請求してきて、生徒の血税をどう思っているんですか？無駄遣い

じゃないんですか？

ユウジ 血税って……。

ユウガ あなた方の会はね、「疑惑のデパート」、「疑惑の総合商社」ですよ！

ユウジ ちよつと、こつちの意見も聞いて下さいよ！

ユウガ 解散ですね。

ユウジ そんな！

ユウガ 解散！

ユウジ あー！ー！ー！。ボタン（倒れるユウジ）

ヨウガ、倒れたユウジに近寄って、

ヨウガ うそーっ！どうして早く言わないんですか？

ユウジ だって、忘れてたんだから仕方ないじゃないか。

部室の外から声。

ミサキ すいませーん、誰かいますかー？

ユウジ ああ来ちゃったよ。

ヨウガ もう、どうするんですか？

ユウジ やべーどうしよう。

ヨウガ 部室汚いのってセーフですかね。

ユウジ いや、アウトだろう。

ヨウガ とりあえず何か発声とか練習してる風にします？

ユウジ うーん。

ヨウガ どうします？

ユウジ 隠れよう。

ヨウガ へ？

ユウジ 隠れるんだよ！

ヨウガ 何で？

ユウジ とにかくこういう時は、隠れるんだ（キツパリ）

部室の道具やロッカーを使って隠れようとする。

段ボールに隠れるユウジ。

隠れる場所を失うヨウガ。

ミサキ 生徒会ですけど本日、活動視察に来ました。誰か居ますか？

ユウジ ほら急げ！

ヨウガ うわー。

ミサキ 入りますよ。

部室に入ってくる女子生徒。

ヨウガは隠れきれていない。

カツラを被せた人形の頭部の横に顔を出すヨウガ。

ミサキ お邪魔しまーす。……誰もいないんですか？何だか埃っぽいし、汚いなあ……何だろうこれ？

ミサキ、小道具などを物珍しそうに触る。

ミサキ、人形の頭部の横にいるヨウガに気づくが、

無視。

検温器を人形の頭部にあてる。

ミサキ さすがに反応しないわね
ヨウガ ……。

ミサキ、隠れきれないヨウガの体温を測る。

ミサキ 三十六度五分……正常ね。

ヨウガ ……。

ミサキ ……何やってるの三好君。

ヨウガ あっ、いやこれは「侍が首だけになった時の気持ち
を体現しよう」と……って、何で俺の名前知ってるんだ？
あっ、甲斐さん？

ユウジ、隠れていた段ボール（下手）ではなく、
洋服ダンス（上手）から、ノリノリで出てきながら、

ユウジ やーらーれーたー。ボタン！（倒れる）

ミサキ きゃ、何なの？

ヨウガ どっから出て来てるんですか、先輩？何のイリユー
ジョン？

ユウジ ヨウガ、こんな時に「解散（カイサン）」なんて言

うなよ。ついノってしまったじゃないか。アハアハアハ。
ミサキ ……？

ユウジ （ミサキに気づいて）うわっ、やばい見つかった！
どうしよう、ヨウガ。

ヨウガ 先輩先輩、落ち着いて下さい。えー、こちら生徒会
の甲斐さんです。

ユウジ うっ、あーっ、ボタン！（倒れる）

ヨウガ 違いますよ。もういいです。それ、飽きましたから。
この子の名前が、甲斐さんなんです。

ミサキ 初めまして、二年、生徒会文化部担当の甲斐です。

ユウジ あっ、そういうこと、それで？

ヨウガ だから……。

ミサキ えーと、あの一、ここ演劇同好会ですよ。

ユウジ ええ、それが？

ミサキ 今日は、どんな活動を。

ユウジ ああーっ！思い出した！ヨウガ！お茶だ、お茶。

お茶をお出ししろ！

ヨウガ あっ、はい。……で、どうするんですか？

ユウジ とにかく時間を稼ぐんだ。

お茶を用意するヨウガ。

手が震えている。

ユウジ どうぞどうぞ、立ち話も何ですし、座ってゆっくり

我が部のことを……、我が部？いやー、滅相もございません。我が会のことをじっくり見ていって下さい。

ミサキ はあ、はい。

ヨウガ どうぞ、粗茶ですが。

ミサキ いえ、お構いなく。それより、消毒液はありますか？

ユウジ と、当然じゃないですか。ほら、お持ちして。

ヨウガ あ、はい。ど、どうぞ。

消毒液を差し出すヨウガ。

消毒するミサキ。

ミサキ どうも。では、検温の方も。

ユウジ あつ、はい。

ミサキ、ユウジの検温をして体温表に記入する。

ヨウガも額を突き出す。

ミサキ、ヨウガを無視する。

ミサキ 三好君はさつき検温したので、大丈夫です。

ヨウガ あ、そうか

なんだか気まずそうな雰囲気

ユウジ では、まず私たち演劇同好会が、かつて演劇部だっ

た頃も含めて、その歴史からお話したいと……。

ミサキ すいません。概要については顧問の先生から詳しく

聞いています。

ユウジ あつ、そうですか。それはよかった……で？

ミサキ ですから、今日は、お二人の日頃の活動風景を見せ

てもらいに来たわけです。

ユウジ ああ、そうですよね。……ほら、ヨウガ。肩をお

揉みしろ。

ヨウガ ?あつ、はい。

ミサキ、手を差し出して拒否するポーズ。

ミサキ 結構です。私のことは気にされずに練習を始めて下

さい。

ヨウガ そ、そうですよね。じゃあ、先輩、ね？

ユウジ よ、よし練習するか。じゃあ、まず柔軟、ストレッチ

チから。

ヨウガ はい。

柔軟をし始める二人。

日頃やっていないので、どことなくぎこちない動き。
なかなか、合わない。

メモを取るミサキ

ミサキ あのー、質問していいですか？

ユウジ ええ、どうぞ。

ミサキ その柔軟は、どういう効果をねらって行っているんですか？

ユウジ 身体を柔らかくすることで、自分の身体表現の可能性を広げるっていうか……

ミサキ 柔軟の他には？

ユウジ ああ、そうですね。発声とか滑舌とかします。

ミサキ 発声って、よく歌を歌う前とかにしますよね。

ユウジ ええ。

ミサキ 歌も歌うんですか？

ユウジ まあ、歌うこともあります。

ミサキ じゃあ、今歌ってみてください。

ユウジ い、今ですか？僕が？ここで？

ミサキ ええ、どうぞ。

ユウジ でも、人前で歌うのは、ちょっと、苦手なんです。

ミサキ そうなんですか。

ユウガ 前に一度カラオケで先輩の歌聞いたことあるんですけど、古い歌ばかりで全然分らないんですよ。

ユウジ すいません。

ミサキ いえ、別に……じゃあ、さつき言っていた滑舌と
いうのはなんですか？

ユウガ それは、口を動かしやすくする練習です。

ミサキ その効果は？

ユウジ 舞台上は、マイクがないのでお客さんにより鮮明にセリフを届けることが出来るようになります。今は、マスキのせいでなかなか難しいんですけど。

ミサキ へえ。

ユウジ ちなみに声優とか俳優になる時に有利っていうか。

ミサキ えっ！なれるんですか声優とか俳優！すごいなあ。

興奮した様子のミサキ。

すこし、驚く二人。

ユウジ ま、まあね。なあ？

ユウガ そうそう、なれますよ。演劇同好会っていいことあるなあ……。

ミサキ で、いるんですか？なった人。

ユウジ えっ？

ヨウガ えっ？

ミサキ 声優とか俳優。

ユウジ いや今のところは……あつああ、アマチュアなら

います。(ドヤ顔)

ヨウガ はい、アマチュアなら(ドヤ顔)

ミサキ はあ、アマチュア……(急に大声で) サギ!

ユウジ へ？

ヨウガ えっ？

ユウジ いや、別にだました訳じゃ。

ヨウガ ごめんなさい。

ミサキ いえ、窓から白い鳥が見えたもので。

胸をなで下ろす二人

ヨウガ (ぼそぼそ) 何か、怖くないですか？

ユウジ 確かに、それに、こういうの緊張するなあ。

ミサキ あの。

ユウジ は、はい。

ミサキ 取材続けていいですか？

ユウジ ええ、どうぞ。

ミサキ 他には、どんなことをしてますか？

ユウジ 今日は、アドリブをやりました。

ミサキ アドリブ？

ユウガ 即興と言つて……よく分かんないかも知れませ

んが。

ユウジ その場、その場の状況に合わせて自由に役を演じる

んです。

ミサキ へえ、難しそうですね。

ヨウガ 最初は、難しいかも知れませんが、自分の思ったこ

とを表現できるのは楽しいですよ。

ユウジ アドリブをやることで、ちよつと大げさですけど、

臨機応変な生きる力とか自分の表現力を豊かにするとか。

あ、これは、顧問の受け売りなんですけどね。

ミサキ さつきから「自分を表現する」とか言われていますが、

この同好会の目的は自分を表現することですか？

ユウジ まあ、そうですね。自分のやりたいことを、芝居に

取り入れて、お客さんから拍手をもらおうと嬉しいですね。

ヨウガ そうそう。あの気持ちは、何物にも代え難いですね。

ミサキ そうなんですか。そんなに表現したい自分というも

のがあるんですか……うらやましい。

ヨウガ えっ？

ユウジ えっ？

ミサキ あつ、いや、他にはありますか？目標とか。

ユウジ あと大会にも出ます。

ミサキ 大会？

ユウジ はい、今大会に出場する台本を準備してるんです。

ミサキ いつあるんですか？

ユウガ 八月です。八月の終わり。

ミサキ 八月ですか……では、六月の生徒総会で報告内容

が承認されなければ、出場できないんですね。

ユウガ えーそんな。

ユウジ 甲斐さん……。

ミサキ まあ、決めるのは私一人じゃないんで。

ユウガ でも、甲斐さんの報告書の仕方によつては、印象が

違いますよね。

ユウジ そうですよ。頑張っている私たちの報告を、よろし

くお願いします。

ミサキ (手を差し出して拒否のポーズ) お願いされても私

は、私情を挟まないのがポリシーです。……、でも

バレンタインの時に……。

ユウガ バレンタイン？

ミサキ 前の生徒会担当者は、バレンタインの時に「全部一

人で食べてね」つて言つて渡したチョコが、友達みんなで、

部活途中に分け合つて食べられていたという事実を知り、

怒つた彼女は、その部活を廃部に追い込む内容の報告書を

書いてましたけど。

ユウガ おーこわい。

ミサキ さらに、他の部にも配つたつて聞きました。

ユウガ ちなみに、何部なんですか？

ミサキ 家庭科部です。その男子は、よりによつてその受け

取つたチョコを湯煎にかけて、新たにテイラミスにして食

べたんですつて。

ユウガ ひどいことする奴もいるんですね。つていうか、作

り変えちゃ駄目でしょ、人として。

ミサキ 私もそう思います。

ユウガ まあ、その点僕たちはチョコをもらったわけでもな

いし、テイラミスを食べたわけでもないし、ねえ、部長。

ユウジ ああ、あの家庭科部のテイラミスかあ、旨かつたな

あ……。

ミサキ ジロリ……：食べてる……。

ユウジ (口を押えるユウジ)！

ユウガ あつ、いや何言つてるんですか、先輩つたらやだな

あ、あははは。

ミサキ あなたもでしたか。

ミサキ、ユウジのネクタイを愛でる

ミサキ いいネクタイですね。

ユウジ え、ええ

ミサキ (豹変して、ネクタイを引っ張る) こら！目を見る目を！

ユウジ ひえー

ミサキ 乙女心を踏みにじる卑劣な行為。ゆるしませんよ。

ユウガ ちよつと、甲斐さん。キャラ変わってますよ。先輩もほら、謝って。

ユウジ ご、ごめんなさい。

ユウガ ほら、甲斐さん、先輩謝ってるじゃないですか。許してあげてっていうか、そのチョコ前任者のチョコで甲斐さんのじゃないですよ。落ち着いて下さい。

ミサキ そ、そうでした、つい……(ユウジから手を放す)

ユウガ もう、ついて。

ユウジ ゲホゲホッ、ああ死ぬかと思った。

ユウガ ほら、甲斐さん。取材取材。

ミサキ そ、そうですね、それで、台本は進んでるんですか？

ユウジ 色々やってるんですが、何せ人数が少ないもので。

ミサキ どういう台本なんですか？

ユウジ 一応シチュエーションは、決まってるんですが。

ユウガ 学校に行きたくない生徒を、先生と親が説得して、立ち直らせるという話です。

ミサキ どうして行きたくないんですか？

ユウジ その生徒は、頭の悪い不良の生徒って設定で、何かトラブルがあつて、そのことを学校から注意を受けて段々嫌になってくるっていう感じで。

ミサキ どんなトラブルですか？

ユウガ それがまだ、決まっていなくて。

ユウジ さっきは、アルバイト先でミスをした話にしたんですが。

ユウガ なかなか、リアリティーないつすよね。

ミサキ うーん、じゃあ、ちよつとやってみて下さいよ。

ユウジ え、今からですか？

ミサキ ええ。どんな感じか分かんると、報告書にも書きやすいですし。

ユウガ そうですね。見てもらった方が早いですよ、先輩。

ユウジ そうだな。じゃあ、先生が問いつめてるところからやってみよう。

ミサキ お願いします。

ユウガ これ、よかったら台本です。

ミサキ ああ、どうも。

カツラをつけるユウガ。

お父さん人形を椅子に座らせる。

ユウジ よーい、ハイ！

第三場 アドリブ

先生 だから、どうしてあんなことしたんだって、聞いてい
るんだ。

生徒 先生には関係ないだろう。

先生 関係ないことはないだろう。僕は、ヨシオ君の担任な
んだし。

生徒 お前なんか俺の気持ちが分かるかよ。

先生 お前ってなあ。

生徒 お坊ちゃんのお前なんか、俺みたいな不良の気持ち
は、わかんねーよ。

先生 不良って。自分で言ったりや、世話ないだろう。

生徒 何だよ！

先生 あのー、お父さん。家では、ヨシオ君はどんな様子で
すか？

お父さん人形に話しかける先生。

先生 ねえ、お父さん。

生徒 また、ダンマリかよ。

見つめ合うヨウガとユウジ。

おもむろにジャンケンをする。

ヨウガ、負けてカツラをとりお父さん役をする。

父 (声色を変えて) 勉強は、あんまりしてないですね。

先生 そうですか。

父 たしかに、私が仕事で忙しくてほったらかしてること
が多くて。

カツラをつけるヨウガ。

生徒 お前が俺の何を知ってるんだよ！

カツラをとるヨウガ。

父 お父さんに向かって、お前って何だ！

先生 ヨシオ君！

父 うるせーよ！

カツラをつけずに生徒役をやってしまうヨウガ

ユウジ (ボソボソ) ヨウガ、カツラカツラ。

慌ててカツラをつけるヨウガ

生徒 うるせーよ!……

見つめ合うユウジとヨウガ。

何だかカツラの取り外しが面倒くさくなる。

甲斐さんの方をじつと見る。

ミサキ どうしました?

ヨウガ あのー。

ミサキ はい?

ヨウガ ちよつと、いいですか?

ミサキ 何か?

ヨウガ だから、その所の台詞。

ミサキ へ?

ユウジ 読むだけでいいですから。

ヨウガ はい。

ミサキ えっ?無理無理。嫌よ。

ヨウガ そこを何とかお願いします。

ユウジ 手伝ってくれたら台本の方もはかどると思います。

ミサキ 別に、私は台本がはかどらなくてもいいですし。

ヨウガ 練習内容の報告書、書かなくちゃいけないんですよ。

ミサキ まあ、そうですね。

ユウジ だったら、手伝ってくれると報告内容も充実すると思えますよ。

ミサキ 私は、別に内容充実しなくても困らないし、大体、内容が悪くて困るのは、演劇同好会のあなた達でしょ。私
が手助けする義理はないですし……。

ヨウガ お願いします。読むだけでいいですから。

ユウジ 甲斐さん、この通り。(手を合わせて頭を下げる)

ミサキ でも……。

ヨウガ 先輩、ラストサマーなんですよ。(泣き声で) この
大会で最後なんです。僕だって、来年、部員が入って来な
かったら、演劇同好会なくなるかも知れないでしょう。だ
から、何とか台本作って大会に出ないと。

ユウジ 大会に出られなかったら、他の学校にいろいろ迷惑
かかるし、OBとかにも顔向けできないんです。

ヨウガ 大会に出ることが出来たら、中学生とかも見てくれ
て、もしかしたら来年新入部員入るかも知れないですし。

ミサキ 私には、関係ないです。

ユウジ 甲斐さんもただ見るだけより、演劇の楽しさとか分かるかも知れませんよ。

ミサキ 別に分からなくても……。

ユウガ ね、お願いします。

ユウジ お願いします。三人のキャストを二人でやるのは、やっぱり無理があつて。

ミサキ だったら、どうして二人しかないのに三人のキャストを使って台本考えるんですか？第一、それだったら、完成してもキャスト足りないじゃないですか。

ユウガ その時は、イラスト部とか放送部に協力してもらいます。だから、ねっ？お願いします。

ミサキ で、でもー。

ユウジ 読むだけですから、ね、この通り。(土下座する)

ほら、ユウガも。

ユウガ あ、はい。お願いします。(土下座する)

ミサキ、渋々応じる。

ミサキ もう、わかりましたよ。読むだけですよ。

ユウジ はい！

ユウガ よろしくお願いします。

ユウジ じゃあ、お父さん役をお母さん役に変更して、お願

いします。

ユウガ よーし、何だかやる気が出てきたぞ。

ミサキ ……あの、ちよつと、読むだけってこの台本、ほとんど台詞書いてないんですけど。

ユウガ いやーまあ、そこはね。

ユウジ アドリブで！

ミサキ そんなの無理ですよ。いきなりアドリブだなんて。

ユウガ まあまあ、いいじゃないですか。適当で。

ミサキ えーっ。

ユウジ ハイ、では改めて。

ミサキ ちよつと……。

ユウガ いいから、いいから。

ユウジ よーい、ハイ！

ミサキ もう……。

三者懇談の芝居が無理やり始まる。

仕方なく椅子に座るミサキ。

先生 で、お父さん、じゃなかったお母さん、ヨシオ君はど

うですか？

ミサキ ……えっ？私？

ユウガ (小声で) ほら、台詞。

母 ああ、台詞ね。……はい、勉強はあんまりしてないですね。

生徒 お前が、俺の何を知ってるんだよ！

急に、大きな声で言われてびっくりするミサキ。

先生 こら、よさないか。

ユウジ、甲斐さんに台詞を言うように促す。

母 ……確かに、私が仕事で忙しくして、ほったらかしにしていることが多くて。

先生 たしか、ご職業は……

間

ミサキ、自分の台詞が終わって油断している。

ミサキ 何？だって、何も書いてなんでもん。

ヨウガ (ヒソヒソ) 何か適当に考えて。

ミサキ 何よ、それ。

ユウジ ほら、アドリブでお願いします。

ミサキ ちよつと、私のこと買いかぶりすぎてない？

ヨウガ 何でもいいんですよ。

ミサキ アドリブなんて無理です。

ヨウガ 甲斐さんならできるよ。生徒会なんだし。

ミサキ 関係ないわよ、生徒会。

ユウジ ほら、じゃあ、行くよ。

先生 たしか、ご職業は。

母 もう、……ええ、看護師です。

先生 そうでしたね。大変でしょうね、夜勤とかで。

母 ええ、まあ。

生徒 先生、お袋関係ねーだろう！

先生 何を言ってるんだ！お前なあ、お母さんは。

ユウジ、近くにあったお父さん人形を投げ捨てる。

先生 お母さんはな、女手一つでお前を育ててきてくれたんだ。それなのに、どうしてお母さんを悲しませるようなことをしたんだ？

生徒 ……。

先生 ……。

母 ねえ、どうして黙ってるの？

ヨウガ あつ、上手いじゃないですか。甲斐さん。

ミサキ いえ、わたしはただ……

ユウジ よし、続けてみよう。

ユウジ 手を叩いて、芝居を止める。

音楽

先生がヨシオを説得している様子。

教室から逃げ出そうとするヨシオ。

母、ヨシオの行く手に立ちふさがり、頬を叩く。

母役のミサキは、台本を片手に段取り風に演技。

先生、なだめている。

ヨシオ、泣きながらうなだれている

先生 なあ、学校を辞めても何にも解決にならないぞ。

生徒 (泣きながら) はい。

母 ありがとうございます。(棒読み気味)

先生 このことは、先生からも校長先生に頼んでおくから、

心配するな。なあ、明日から学校に来いよ。

生徒 先生！(抱きつく)

先生 おいおい、ソーシャルディスタンス。

生徒 あ、そうでした。すいません。

母 本当にお世話になります。

先生 よかったですね。お母さん。

母 ありがとうございます。(棒読み気味)

ユウジ まあ、なんとか形になりました。

ヨウガ 本当、本当。

ユウジ 甲斐さんのおかげですよ。

ヨウガ 甲斐さんもアドリブ上手かったですしね。

ミサキ そうですか？ただ、読んでただけですけど。

ユウジ 十分ですよ。なかなか、ハマリ役でした。

ミサキ そんなあ。(まんざらでもなさそう)

ヨウガ とりあえず、大会にはこんな感じでまとめていけ

ば、間に合うんじゃないですか、先輩。

ユウジ そうだな。

ミサキ じゃあ、私は、練習内容を報告書に記入しておきま

すね。

ユウジ ああ、いろいろよろしくお願いします。

ミサキ ええでも、キャストが足りなくてイラスト部から借

りるって事はきちんと書かせてもらいます。多分、マイナ

ス印象になると思いますけど。

ユウジ 仕方ないです。事実ですから。

ヨウガ 活動内容は、とても素晴らしいって書いてください

ね。

ミサキ (手を差し出して拒否のポーズ) 私は、私情は挟み

ません。

ヨウガ もう、しつかりしてるなあ。ははは。

ミサキ うふふ。

ミサキ、報告書の記入をしている。

ヨウガ、カツラを外したり、上着を脱いだりしている。

ユウジ うちの学校、大丈夫なんですかね。

ミサキ えっ？

ユウジ 今年に入って、三つ部活がなくなったでしょう。

ヨウガ そうそう、ESSに園芸部、あとハンドボール部。

ミサキ はい。

ヨウガ 運動部も例外ないんですね。

ユウジ 今年の剣道部の廃部は、びっくりしました。

ヨウガ 本校の看板クラブも容赦ないって感じでしたよね。

ミサキ 本校の生徒数がピーク時の半分まで減少して、部活

動予算も厳しい状況で、部活を縮小していこうという方向
なんです。まあ、コロナの影響も少なからずあると思います
すけど。

ユウジ マスクしながら部活するの大変だもんなあ。

ミサキ 剣道なんかは、防具の下にマスクですからねえ、大
変だったと思います。

ヨウガ そういえば、今年は昨年より、新入生のクラス数が、
減りましたよね。

ユウジ ああ、そうだな。

ミサキ あと、ウチは私立ですし、これからは進学に力を入
れるから部活動は、さらに仕分けられると思います。

ユウジ そうですか……。

ミサキ すいません。

ヨウガ いや、甲斐さんが謝る必要ないですよ。

ミサキ でも、このままだと間違いないく演劇部も仕分けの対
象だと思いますし。

ヨウガ やっぱり。

ミサキ 歴史、古いですよね。

ユウジ はい、確か野球部の次に古いらしいです。OBも多
いから、いろいろと注文も多いですけど。

ミサキ じゃあ、なくなっちゃったりしたら、それこそ大変
でしょうね。

ユウジ まあ、そうならないように大会で頑張りますよ。な
あ、ヨウガ。

ヨウガ はい、頑張りましたよ！燃えてきたぞー！

ユウジ その意気、その意気。

ユウジ、黒板の地区大会の日程にアンダーラインを

引く。

ヨウガ、小道具の整頓をしている。

ミサキ、報告書記入の手が止まっている。

ミサキ ……。

ユウジ 生徒会も大変ですね。

ミサキ 何がです？

ユウジ 部活動仕分けですよ。

ミサキ ああ、一部の教員や保護者からは評判がいいみたいですが、クラブ顧問からは、やりすぎだって。

ユウジ 批判もあるんでしょう？

ヨウガ 華道部の人たちが、生徒会にいらまれたら大変だって言っていました。

ミサキ まあ、いろいろ言われることありますけど任されてる仕事なので。

ユウジ 実際に、その報告をする側の気持ちってのは、また複雑なんだろうし。

ヨウガ 報告される側は、つぶされたくないから、いろいろ文句言ったりするだろうし、僕たちだって……あつ、す

いません。

ミサキ なれてますよ。そういうの。

ヨウガ まあ、甲斐さんは、頭が良くて生徒からも信頼され

てるから、そういうのはないだろうけど。

ミサキ そんなことないですよ。

ヨウガ いや、本当ですよ。

ユウジ 心痛も多いでしょうね。どうですか。よかったら、ラムネ差し上げますよ。

ミサキ ラムネ？

ユウジ スッキリしますよ。

ミサキ (手を差し出して拒否のポーズ) 私は、ワイロは受け取りません。

ユウジ いや、あの、そんなつもりじゃないですよ。

ミサキ わかっていますよ。ありがとうございます。

ユウジ いらないですか。

ミサキ ええ、お気持ちだけ頂きます。じゃあ、失礼します。

ユウジ ご苦労様です。

ヨウガ 報告書よろしくお願いします。

ミサキ では。

ミサキ、部室を出ようとして、

ミサキ あつ、しまった。部活印をもらわないと。すいませ

ん、ここに部活印ありますか？

ユウジ あ、はい。ちよつと待って下さい。

ユウジ、部活印を棚から探してミサキに渡す。

ユウジ はい、どうぞ。

ミサキ どうも。

プリントに印を押ししたり、報告書の記入をするミサキ。

ユウガ ねえ先輩、もう一回、今のところをやり直してみましようよ。

ユウジ そうだな。でも、お前バイトは？

ユウガ 今日は七時からなので、もう少し遅くていいです。

ユウジ そうか、よし。もう一回やるか。

ミサキ あのー、印鑑ここに置いておきます。

ユウジ あ、はい。ご苦労様です。

ユウガ、カツラを着けて芝居の準備をする。

部室を出ようとするミサキ、何か思い立って、

ミサキ ……それと、バイトの話。

ユウガ ギクッ！い、いやだなー、甲斐さん。バイトの許可ならちゃんと取ってますよ。そりゃあ、時々、九時を

過ぎることもありますけど。

ミサキ そのことじゃなくて、ヨシオ君のバイトの話。

ユウガ ああ、台本の。

ユウジ どうかしましたか？

ミサキ さっきの台本読んで、ちよつと、思ったんですけど。学校に行きたくないとか辞めたい理由って、バイト先でのトラブルだけじゃ弱い気がするんですよ。何だか、リアリティーがないっていうか。自分のこと不良で強いつて思ってる人が、学校行きたくないって言いますかね。

ユウジ そう……ですね。

ミサキ 私、思うんですけどそのあたりをきちんと決めておかないと、上手くいかないんじゃないですかね。

ユウガ たしかに、やってて、やっぱりその辺がひっかかりますもんね。甲斐さんすごい！

ミサキ いや、まあ。(照れてる)

ユウガ でも、どうしよう。

ユウジ 不良の生徒が、学校に行きたくなる理由って、何だろう？

ユウガ ……人を殺した。

ユウジ いや、行きたくないんじゃないんでしょ、う、それ。

ミサキ 退学だと思えます。(キツパリ！)

二人 いやいやいや。

ユウジ それだけじゃ済まないと思うよ、甲斐さん。

ヨウガ うんうん。

ミサキ たしかに、そうですね。

思案している三人。

ヨウガ そうだよなあ……うーん。じゃあ、馬鹿だから勉強

強が嫌だとか。

ミサキ まあ、あり得ると思いますけど。

ヨウガ 面倒くさいとかウザイとか言っつてそうだし。

ユウジ 何かドラマがないよなあ。

ヨウガ 誰かをいじめていて、学校に来られないってのは？

ユウジ うーん、いじている方が来なくなるのって、ある

のかな？

ヨウガ むずかしいなー。まあ、不良の気持ちなんてわから

ないしねー。

ユウジ 不良にやられる方なら理解できるけど。

ヨウガ そうですねー。

ユウジ だよな。

二人 ハハハハ。

ミサキ ……じゃあ、いじめられてたとか。

ユウジ えっ？

ヨウガ えーっ、不良なのに？っていうか甲斐さん、いじめ

る方がいいめられるって、どんな設定？

ユウジ キヤラ的にはいじめる方だと思うし。相手の方に、

学校に来るなって言いそうだからね。

ミサキ だから、そんな風に言っていたら、実はクラスで独

りぼっちになってたとか。

ユウジ ？！

ヨウガ ？！

ミサキ で、誰も相手にしなくなって……。

ヨウガ なるほど、それで、友達だと思っつた奴からも裏切

られムシヤクシヤしてるのが爆発して教室のガラスを

割った。

ユウジ 事態を重く見た担任は、どうしてそんなことをした

のか問いつめるが、不良でイキがってるから、自分がクラ

スでいじめを受けてるなんて言えない。

ヨウガ ましてや、言っても誰も信じてくれない。

ユウジ あげく、クラスの生徒を殴り謹慎となる。

ミサキ 不良のヨシオには、暴力でしか自分の気持ちを表現

できなかつた……。

ヨウガ ねえ、先輩。ちよつとやってみませんか？

ユウジ ああ。
ヨウガ 甲斐さんも。
ミサキ ええ、はい。

第四場 笑顔の向こう

音楽

ユウジ、ミサキにお母さん役の衣装を渡す。
お母さんの衣装を着るミサキ。

先生 何があつたんだ。お前はいつもイキがつてるけど、人にだけは、手を挙げた事なんてなかったじゃないか。

生徒 うるせーって言ってるだろう！

先生 クラスで何かあつたのか？

生徒 ……。

先生 タカシがお前に何かしたのか！

生徒 ……。

先生 タカシはな、まじめで気が弱くて、お前なんかと違ってな……。

生徒 何だよ！お前、全然わかってないよ。

先生 何だと！

母 ヨシオ……。

生徒 まじめな奴があんなことするのかよ。……そりゃあ、クラスでいろいろ威張っていた俺が悪いけどさ。自己中心的でどうしようもない奴だよ。だけどさ、俺だつて誰かと分かり合いたかつたんだ。でも、どうしていいかわからなくて、みんなを馬鹿にしたり、命令して従わせてるぐらいでしか、みんなの輪にいられなかつたんだ。

母 ヨシオ……。

生徒 まわりに人がいないと不安だから、格好つけて不良してみてさ、

先生 そんなことするから余計に……

生徒 わかつてるよ、俺だつて、そんなことしてたつて誰も友達になんかならないつて。でも、どうやったら、心を開いてくれる友達が出るんだよ。誰が俺に本当に優しくしてくれるんだよ。

先生 お前がもつと素直になれば。

生徒 ……そうなんだろうな、そうできればあんな事もなかつたのにな。

先生 何があつたんだ。ヨシオ。

生徒 そしたらよ、クラスみんなが、何話しかけてみても俺のこと無視するんだよ。もともと俺が悪いのは、わかっているけど。……あいつら汚いんだ。どんどんやることがエスカレートしだしてさ。机に落書きしたり、

メールやイタ電、全員でできて……そしたら、タカシの奴、調子にのって、俺の弁当に消しカスを入れやがって……母ちゃんが作った弁当によお……俺、許せなくて、許せなくてさー。

先生 そうだったのかヨシオ、わかった。先生が何とかする。だから、学校には来い。このままお前が辞めたりなんかしたら先生は……、

母 あはははは

先生 お母さん？

生徒 何、笑ってんだよ。

母 だって、嬉しくてさ。ヨシオがこんなに自分のことを言ったの初めてじゃないかね。

生徒 はあ？

母 先生、ヨシオはあと何日ぐらい休めますか？

先生 何日って、お母さん。

母 何日休めます？

先生 まあ、二十日ぐらいでは、大丈夫かと。

母 そうですか、わかりました。

生徒 何なんだよ。

母 今みたいに、お前がちゃんと心を開けば、きっとクラスのみんなも心を開いてくれるよ。だから、ほら、もっと笑って。ね、タカシ君にもちゃんと謝って、そして笑顔に

なって、格好つけずに自分をちゃんと出して……学校は、行きたくなくなったら行けばいいよ。

生徒 母ちゃん……。

母 私はね、あんたが不良だとは一度も思ったことはないよ。きっと、寂しいんだろうなあって……。もちろん、お母さんもいろいろ泣いたり、わめいたりして怒ったこともあるけど、多分そうやって、私が怒るからお前も心を開きたんだろうね。だから私は、笑うから、お前も笑顔になりなさい。

生徒 ……わかった。

ユウジ、立ち上がって拍手。

ユウジ すごいよ。甲斐さん！本当にすごい！

ミサキ いや、何となくね。

ミサキ、照れながらお母さんの衣装を脱ぐ。

ユウガ 何かさつきより全然ふくらんだじゃないですか。

ユウジ ああ。

ユウガ 何とかかなりそうですね。

ユウジ すごいなあ、あんなにスムーズにアドリブが出来る

なんて。

ヨウガ 本当、本当。リアリティーあったよなー。

ユウジ うんうん。

ヨウガ、近くの人形を持つ。

人形に向かって、ミサキの台詞を真似る。

ヨウガ 「私も笑うから、お前も笑顔になりなさい。」

ユウジ おお、そうそれ。そうだ、忘れないうちにメモして

おこう。

ヨウガ そうですよ、名演技だったんですから。

ユウジ 分かっているって。

ユウジ、台詞をメモする。

ヨウガ 先輩。甲斐さんってもしかしたら、小学校か中学で

お芝居したことあるんじゃないですかね。

ユウジ そうだな。

ヨウガ きつと、そうですよ。

ユウジ だな。

ミサキ 本当は……、本当はそんな風に心を開いたとしても「ウザイ」とか言われるんですよ。

ヨウガ えっ？

ユウジ えっ？

ミサキ 私、学校に行けない時があったの。

ヨウガ 甲斐さんが？

ミサキ 小学校の時、みんなから「馬鹿でネクラ」っていうじめにあつて。

ヨウガ 馬鹿？

ユウジ ネクラ？

ミサキ 学校に行けない私を心配して、みんな悲しそうな顔したり、学校に行かないのを怒鳴られたり……、本当に泣きたくて、怒鳴りたいのは、私の方なのに。

ユウジ ……。

ミサキ したら、ある時お母さんが急にケラケラ笑い出すの。「ミサキ、それでも笑いなさい」って、「いろいろ言われるかも知れないけど、きつとあなたが心を閉ざさなければ、わかってくれる友達がいる」って。「そして、後からきつと今のことは、笑えるようになる」って……。だから私、泣かないで笑ってしようって決めたの。そして、今度は、「いつつと、へらへら笑って気持ち悪い」ってまた、いじめられることになってね。そんなこと繰り返してたら、本当馬鹿みたいだなあって感じてきて、「もうそんなこと気にしないでいよう。」って思うようになった

の。一杯いっぱい、勉強してみんなと違う学校に行けば、また変われるかなって思ってた。勉強いっぱいしました。そして、心を閉ざして、そんな人たちの記憶から、忘れられるように目立たないように生きようって決めたんです。おかげさまで、今は、私立の高校に来ることが出来て、生徒会までやってるんですけど

ヨウガ ……。

ミサキ えへっ。

ユウジ 甲斐さん……。

ミサキ 多分、小学校時代の同級生は、私の事なんて本当に、覚えてないと思う。……ね、明和小の三好君。

ヨウガ えっ？うそ……、もしかして甲斐さんって、明和小学校？

ユウジ 同じ小学校だったのか？

ヨウガ あ、いや、気付かなかった……マスクもしてるし……。

ミサキ そんなもんよ。

ヨウガ ……ごめん。

ミサキ いいのよ。人ってね、変わるもの。ずっと昔のままじゃないから。私、あの時のことがあるから、今いろんな事が見える気がするの。そういう意味では、学校に行けなかったあの時期に感謝もしてるわ。お母さんの言うと

おり、本当に、昔の嫌なことを笑えるようになったもの。

ヨウガ 甲斐さん……。

ミサキ (時計を見て) あっ、もうこんな時間。じゃあ、私行かなくちゃ。今日、書道部の視察にも行かないといけないのよ。

ヨウガ そうなんだ、忙しいね生徒会も。

ミサキ まあね。

ユウジ あの、甲斐さん。今日は、本当にありがとう。

ミサキ 私も楽しかったです。演劇部がこんな事やってるなんて知りもなかったし、何か、演劇部に入ってもいいかなあって思ったりして、うふっ。

ヨウガ えっ！本当だったら、うれしいな。ねえ先輩。大歓迎ですよ。

ユウジ そりゃあ、もう。甲斐さんならすぐに主役です。

ミサキ (手を差し出して拒否のポーズ) もう、おだてても報告書の内容は、変わらないですよ。

ユウジ わかってますよ。はははは。

ミサキ うふふふ。

ヨウガ はははは。

笑いながら、「大会に出ませんか？」

「無理ですよ、」そんなの」などと言っている二人。

ユウジ あの！僕、歌います。

ミサキ え？

ユウジ 聴いてください。

呆気にとられる、ミサキとヨウガ。

ユウジにサス。

マスクを外して歌をうたうユウジ。

『赤ちようちん』 かぐや姫

作詞 喜多条忠 作曲 南こうせつ

雨がずっと仕事もせずに

キャベツばかりをかじってた

そんな暮らしがおかしくて

あなたの横顔見つめてた

あなたと別れた雨の夜

公衆電話の箱の中

膝を抱えて泣きました

生きてることはただそれだけで

悲しいことだと知りました

ユウジ この曲は、僕が中学の時にみんなにじめられて、

「うたえ！うたえ！」って言われて歌った歌です。あんまり古すぎて、最初はみんな笑っていたんですけど、そのうちみんなどこかに行っちゃいました。

ミサキ どうして、その歌を歌ったんですか？

ユウジ 最後の「生きてることは悲しい」っていう所をみんなに聴かせたくて歌ったんですけど、誰も最後まで聴いてくれませんでした。……僕、悔しくて悔しくて……。

ヨウガ ……。

ユウジ それで高校でも、みんなに馬鹿にされたり、相手にもされないんですけど、ここはよかったです。先輩や先生が僕にでも出来ることあるって教えてくれました。

演劇なんて誰も興味ないと思います。だけど、僕にとっては、最高の場所でした。顧問の先生が、この世の中に不必要な人間がいらないのと同じで、演劇もどんな人にも出来る役があるって言うんです。

ミサキ ……。

ユウジ 「駄目出し」って言って、みんなでお互いの駄目なところを言い合えるのが演劇だって。その時は、裏方も主役も関係ないって。だから、僕は、がんばれました。誰よりも才能もセンスもないけど、スキップも出来なくてリズム感もないけど、僕にもスポットライト浴びる場所が

あつたんです。「生きてることは、悲しくない」って感じることが出来ました。

ヨウガ 先輩……………。

ミサキ よかったですね。輝ける場所があつて。

ユウジ 甲斐さんも、今は十分輝いてますよ。

ヨウガ 馬鹿で、ネクラじゃない！

ミサキ ありがとう。……………大会がんばって下さいね。

ユウジ はい。

ヨウガ 先輩のラストサマー、少しでも長くさせますよ。

ミサキ それじゃあ、失礼します。

ユウジ 報告書お願いしますね。

ミサキ あ、はい。

ミサキ、部室を出ようとするが、戻ってきて、

ユウジに歩み寄る。

ミサキ (手を差し出して) あの……………、ラムネ、もらつて

良いですか？

ユウジ はい、どうぞ。

ミサキ、ラムネをもらう。

マスクを外してラムネを口にする。

ミサキ おいしい。

ヨウガ あつ。

ミサキ ん？

ヨウガ いや、マスクを外したら、小学校の時の甲斐さんを

思い出しました。

ミサキ また、調子の良いこと言つて。

ヨウガ へへへ。

ミサキ じゃあ、また。

ユウジ どうも。

ヨウガ 入部のことも前向きに考えてくださいね。

ミサキ、部室を後にする

ヨウガ 大丈夫ですかね。

ユウジ 何が？

ヨウガ 報告書ですよ。

ユウジ ああ。

ヨウガ ああ、じゃないですよ。報告如何によつては、大会

に出場できるかどうか。

ユウジ それ考えても仕方ないか。

音楽

ヨウガ まあ、そりやそうですけど。

ユウジ とりあえず、もう一回、やっとくか？

ヨウガ そうですね。バイトまでまだ時間ありますしね。

ユウジ ああ。

ヨウガ それじゃあ、マスク外しませんか？

ユウジ え？

ヨウガ もう、よくないですか？

ユウジ そうだな、密じやないし。

ヨウガ へへへ

二人、マスクを外して、芝居の段取りを打ち合わず。

次は、ユウジがカツラをかぶりお父さん役に。

お父さん人形は、先生役に。

部屋にある、たくさんのぬいぐるみを集めてきて、

家族に見立てて十者懇談にする。

ヨウガ ねえ、先輩

ユウジ なんだ？

ヨウガ いい夏にしましょうね！

ユウジ ああ！

音楽アップ。

ヨウガ へへへ。

ユウジ よし、よーい、はい！（手を叩く）

音楽の中、二人の芝居がはじまる。

マスクを外していつまでも続く。

幕